資料２

各委員からの提案資料

# 旧理学部1号館の保存・活用の提案

## コンセプト『若者文教の街・芸術の街』の再開発

共同提案者　広大本部跡地活用促進会（千田地区）
千田地区社会福祉協議会、千田学区町内会
千田通り商店街

# 若者文教の街

広島大学は惜しまれて千田地区から移転しましたが、このたび東千田キャンバスに医学部（医学科・保健学科・）歯学部・薬学部の教養課程を中核とする４階建て新築棟が16年4月に開館されます。

全国的に移転が注目されている大学で、政令指定都市広島に国立大学の都心回帰がようやく現実化してきました。

学生の数が増えることは広島の人口増、就業の機会促進、知的人材育成による街と地域の活気と賑わいを復活させることになり、街のコミュニティと、街の発展をもたらす環境に結びつけることでもあります。

広島大学東千田キャンパス敷地内では教育教養ゾーンとして東千田未来創生センターを新築。

続いて広島大学本部跡地は民間事業者の知的材育成センターをサポートする（仮称）広島大学本部跡地ナレッジシェアファームを新築、学生・留学生向け賃貸マンション（145戸）、学生の就職・アルバイト紹介窓口、ベンチャー支援オフィス運営・ 学生情報センター）、クリエイター要請スクール、コンビニ・調剤薬局、医療福祉法人材サポートセンターが17年3月末に竣工予定されています。

# 若者文教の街

　ナレッジシェアプラザ新築では、多目的室、音楽室、キッズルーム、スタディルーム、キッチンスタジオ、芝生広場も54階建て（665戸）が20年1月に完成予定で、付帯的に同時完成がされます。
知の拠点エリアを更に推し進めて、旧理学部1号館を広島大学は医学部、薬学部、歯学部のほか、すべての教養課程の学生たちが、こぞって文教の街であった千田での学習が可能となるように希望いたします。
旧理学部1号館再生は広島市と広島大学が連携してよく協議をされれば、最小投資で最大効果となる教育の発展になるのではと考えます。
　併せて私学各大学に於きましても旧理学部1号館の場所が学生たちの私学大学共通教養課程となることも希望をいたします。
　この地区が広島の若者が集う新しい大学の集積にしてほしいと希望します。

# 芸術・交流の街

民間事業者による再開発は都心のオアシス空間の千田公園と一体となるように緑地を増やし、開放的な配慮をして頂きました。

この旧理学部1号館は被爆建物で、市民や地域住民が慣れ親しんだ景色でもあります。国際平和文化の象徴として、旧理学部1号館が被爆建物として残す意義を共有するとともに、被爆正面の象徴的な一部の鉄扉も復元されることを希望します。

この建物を活かしたライトアップやプロジェクションマッピングで広島の歴史や文化、平和都市としての映像イベントも開催したいものです

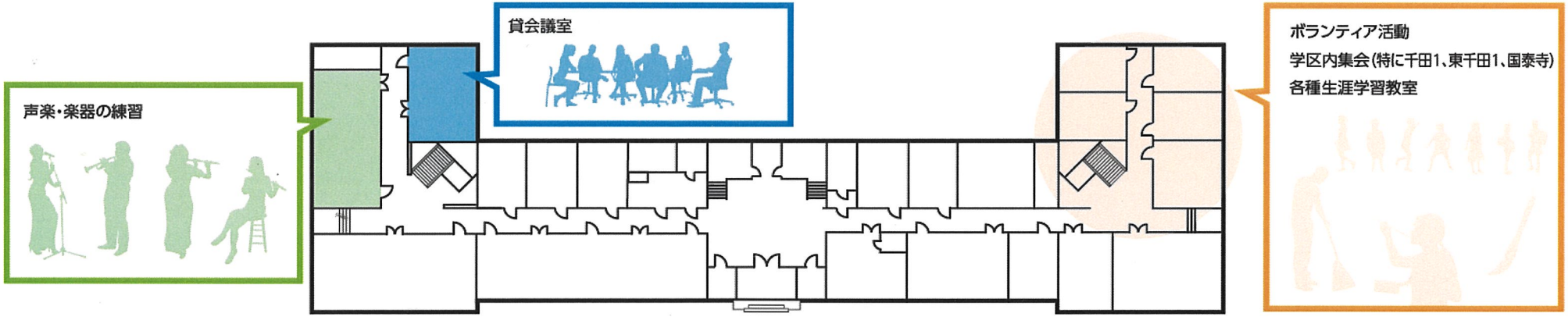
旧理学部１号館前の森戸ロードは格好の広場にもなることでしょう。

ビールフェスタや酒祭りのような交流イベントも街の活性化に有効です。

## ■プロジェクションマッピングでの活用案

# 芸術・交流の街

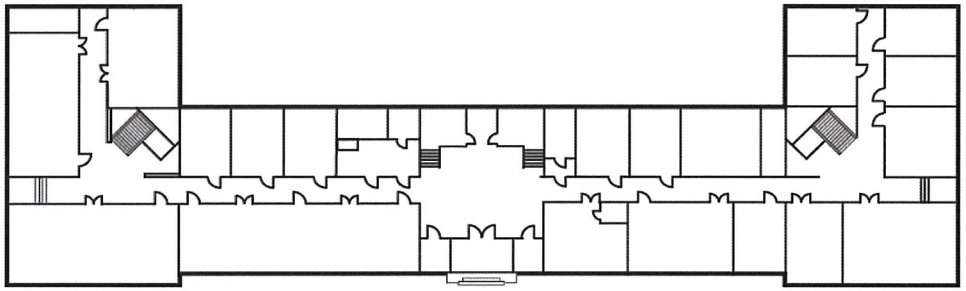
旧理学部1号館後部3列建物の解体部分された平地活用として、当面は学生数や授業内容で新築統合か決まるまでは、駐車場としても活用できます。
また隣接する公園の利用として彫像の展示を設置希望いたします。
旧理学部1号館は芸術を目指す市民や大学の学生たちが彫像や絵画や音楽練習などの発表や 学習交流のできる場所となることも希望いたします。
広島大学跡地を囲む千田地区のへそ中心の場所にあたる代替会議施設の利用で、コミュニティとしてボランティア活動、イベント、各種生涯学習セミナー教室を地元が管理、利用できるよう希望いたします。
地区町内会では地域内に集会場のない町内会が多数あり、また今までの利用施設も老朽化して将来、千田三丁目にある木造の集会所は解体の方向、福祉センターの移転など利用できなくなる施設があり、今後大変困ることになると思われます。
旧理学部1号館にはエレベーターの設置も希望いたします。



# 芸術・交流の街

　@旧理学部1号館の保存方法については当面は玄関を中心とした3500㎡とし、今後の方針によっては後部新築建物を拡充していけば良いと考えます。
そのためE字型の後部建物の両サイドの一部（町内会・各種生涯セミナー・地域趣味の会・芸術創作・音楽練習）を残し、基本的に縦３列棟は撤去されることを希望いたします。
広島ナレッジシェアパークは　『知を育み、定着させ、持続させるまちづくり』をコンセプトとして選定され、広島大学本部跡地の再開発になりました。
民間事業者の高層マンションなどは空間を活かす苦肉の策でしたが、このたびの旧理学部１号館は基本コンセプトを忠実に推し進める未来志向の利活用になることを願います。

**大学教養課程活用による**
**将来の増設スペース**



２０１６年８月３日

# 旧理学部１号館の保存・活用について

原爆遺跡保存運用懇談会　世話人　石丸紀興
（元広島大学教授、元広島国際大学教授）

具体的な提案の前に基本的な条件について検討しておく必要があろう。もちろん具体的な提案の説明の際に理由づけとして敷衍することも可能である。

基本条件

１．広島大学の起源としての象徴的な場所・建物であったことを重視すること、学都の象徴であることに留意すべきこと

２．被爆による甚大な被害、教員・職員・学生の被爆、とりわけ留学生の被害がここで発生したことを十分に配慮すべきであること

３．広島大学が移転して以来 20 年以上を経過して、建物として極めて老朽化、コンクリートの劣化、防水性の喪失、外壁の剥離拡大、結果として耐震性の著しい低下が進んできたことを認めなければならないこと

４．耐震性をいかに確保するかが極めて重要であることは論を待たないが、これをどのレベルでクリアするかの基本方針が重要であること

① 国の重要文化財として指定を目指し、基準法の規定を免れる道を追求する(指定までに時間がかかるし、簡単にいくわけではない)

② 歴史的建物の保存方策として法体系を変革し、画期的な方策を模索するくらいの道を追求する（これも簡単ではない）

③ 現法体系を前提として新たな画期的な耐震性技術を考案する（これも簡単ではない）

④ すでに検討されている技術的対応の中から選択する(費用問題と関連する)

５．単純に将来の建物機能をどうするかとして議論して決定しても、あとから耐震性や改修費用の点で問題あるとして決定を却下される可能性がある。そのためには、並行して耐震性問題のチェックや改修費用のチェック等を同時的に進めておく必要がある。すなわち、できれば建築構造分野、改修設計分野の専門家を中心とした「改修技術検討小委員会」(仮称)のような組織を設置して検討を進めていただきたい。

６．機能的な検討を進めるには、標準階が中廊下形式、小部屋に区分されており、この条件が生かされることが望ましい。また、Ｅの字型のままするか、真ん中の部分を解体してコの字型とするか、という問題がある。さらにコの字型としても抜かれた中の部分を室内化して一体的に利用する方法もあることを配慮しておくべきであろう。最近の海外事例においてこのような改修はよく見られる方法であり、決して無謀な方法ではない。
なお、コの字型にした場合、抜かれた中の部分に強力な鉄骨による耐震壁を挿入し耐震化を増大させることも可能であろう。

７．いずれにしても、あまりに長期に放置されていたことから著しく風化が進み劣化弱体化していることをどう克服するかということになるが、同時に今まで解体されずに存続したことに改めて最大限の幸運を噛みしめ、悔いのない取り組みが必要であることを確認すべきであろう。

８．具体的な機能を含めた提案は次回までにさせていただく。